

肩に関する動作の解釈

医療法人寿山会 喜馬病院 法人リハビリテーション部

井尻 朋人

日常生活の中で上肢の使用は非常に多くの場面で行われている。肩関節に機能障害を負った患者さまにおいて、様々な生活場面で上肢の使用に制限を来し、リハビリテーションにおけるニーズは多岐にわたる。特に、食事動作、更衣動作、結帯動作、結髪動作、高いところのものをとる動作などの動作の改善を訴えられるケースが多い。では、これらの動作についてどの程度正常動作を理解できているであろうか。生活で生じるこれらの動作は肘関節、手関節、手指を含めた複合的な動作であり、一つの目的に対してそれぞれの関節は相互に影響し合っている。また、複合的な動作ゆえに正常動作においても様々なバリエーションがみられることも多い。歩行動作とは異なり、正常の中にも幅があるということである。これらの正常な動きをある程度理解しなければ、患者さまが行っている動作を解釈することは難しい。そのため、まずは正常な動作について、またそのバリエーションについて理解する必要がある。今回は、結帯動作を例にとりその動作の特性について検証する。そのうえで、動作時のそれぞれの関節運動をどう理解するか、相互関係はどうであるかについて、動作分析を行っていく。

さらに、正常動作にバリエーションがあるということは、目指すべきゴールの選択肢が複数あることを意味する。つまり、どのような動作を理想とするか、どのような動作に導きたいか、を最初の段階で明確にする必要がある。リハビリテーションは、現状と理想の間を埋める作業であり、理想が無ければ現状とのギャップも把握できない。どのようなことが問題であるかが検出できないということである。当然ゴールが違えば問題となる動きも違ってくる。問題となる動きが違えば問題点が変わってくる。問題点が変われば治療内容が変わる。したがって、どのゴールを選択するかによって治療内容が大きく変わってくるということである。その点も踏まえて動作分析を行い、問題点の予測を行っていく必要がある。